

広報あかいか

特別号
発行日 昭和47年10月20日
発行所 赤池町役場企画室

総合計画基本構想



赤池町長 池永輝昭

はじめに

石炭の町として栄えてきた赤池町も、エネルギー革命による国の石炭合理化政策により、昔年の隆盛も今はなく、二万人に近い町の人口もその半数以下となり若年労働者等の県外流出により更に減少の一途をたどり、過去の栄光も今は昔日の面影でしかありません。

国の高度経済成長による国民総生産の世界的高順位とはうらはらに、産炭地域経済の復興は遅々として進んでおりません。

こうした状況の中であって、地域住民の生活水準は都市との地域格差を益々深めており、「ひずみ」を生ぜしめております。

私は、町長就任にあたり、「住民福祉最優先」を政策の指針として、積極的な行動と勇断をもって実現のために努力を続けることを約束しました。その実現のために、ここに赤池町総合計画を樹立し十ヶ年の基本構想を策定いたしました。

この基本構想は、県総合開発基本構想筑豊地域振興対策基本構想を中心に、赤池町の当面の問題点、将来像、基本的施

交通体系の整備の立ち遅れなど、いずれも産業基盤の低下と生活環境の悪化を非常に強め、またその速度を速めている。最近に至っては、さらに公害の発生、消費物価の上昇、農業後継者の問題、中小企業の労働力不足などの問題を生み、「ひずみ」は益々大きくなりつつある。

(一) 赤池町が直面している問題

前述の高度成長に伴う「ひずみ」をどう克服は正し、赤池地域の発展をどう促進して行くか。一言で尽せば、赤池地域住民の福祉をいかにして増進するかという点に集約される。それには、町独自の力で解決し得るもの、県の力を是非とも必要とするもの、国家的な力をまたなければ出来ないものが重積し混在している。三者の力を多方面に必要に応じてそれぞれを結集しなければならぬ。

特に広域的な見地からすれば、町独自の力以上に県や国の力が必要であり、国県、町が相互に協力し合い、それぞれの任務を最大限に果たし時期をあやまることなしに適切な処置をこうじることが、何よりも肝要である。

(二) 計画の必要性

以上のような理由から赤池町にあって明るく豊かな地域社会を築くには、先ずその進むべき方向と将来を予測し、多方面な行政の中でどのような施策が住民の福祉向上に最も役立つかを総合的かつ適確に判断しなければならぬ。

次に、その具体的な実行実施にあたっては、財政的な裏付けをじゅうぶんにみだし、必要かつじゅうぶんな用意のもとに踏出さなければならぬ。この両者の計画と財源は言わば、車の両輪であって表裏一体をなすものであり、財政的な見透しのない計画は有名無実なものである。今日では、赤池町行政の内容も複雑多岐にわたり、その機能の拡大と質的な向上が要求されるにつれて経済も漸増傾向にある。

しかし、町自体の財源にはおのずから限界があり租税負担軽減という住民の要

請もあって、その間の調整は極めて困難となりつつある。よって益々責任の重大さが痛感される所であり、財政の健全さを損わずに福祉を増進するには、抜本的な考え方の飛躍が要求されるわけである。

ここに町自体を一つの経営体と考え、特に財政については消費的な出費の節減をはかり、逆に有効な投資的要素の経費を少しでも多く捻出することが、必要かつ欠くべからざるものとなって来るわけである。

節減については町行政の運営をじゅうぶんに検討し、徹底した合理化、近代化を進めることは勿論、投資についても行政上からその緊急度、重要度、効率などを考慮し、その順位の決定と秩序正しい運用の必要なことは言うまでもない。

要するに、これらは単なる思い付きやその場限りの行政によっては望むことの出来ないものであり、町自体が積極的に志向し、長期的な視野にたつて始めて可能となるものである。

本町行政の計画的なマスタープラン、赤池町総合計画の基本構想がもとめられるゆえんである。

赤池町は どんな町か

総合立案に先だって、素材としての赤池町をもう一度見つめ直す必要がある。知り尽くしているようでありまた殆んど知らないようでもある。故郷とはそういうものである。

(一) 立地条件と沿革

かつての石炭王国は筑豊炭田の中核部福岡県の中部、田川郡の北端に位置している。

東は田川郡方城町及び福智連峰を境として北九州市小倉区、北は直方市と接し南は彦山川沿に田川郡金田町及び田川市西は嘉穂郡頼田町、鞍手郡小竹町を経て飯塚市にたつらなっている。

総面積十六・二八平方キロメートル、東西五、九三キロメートル、南北四キロメートル、地勢は周囲を丘陵で囲まれた小盆地で、その中央部を彦山川が貫流し、支流中元寺川をあわせて遠賀川となり遠く北九州芦屋の玄海灘に注いでいる。

(二面へつづく)

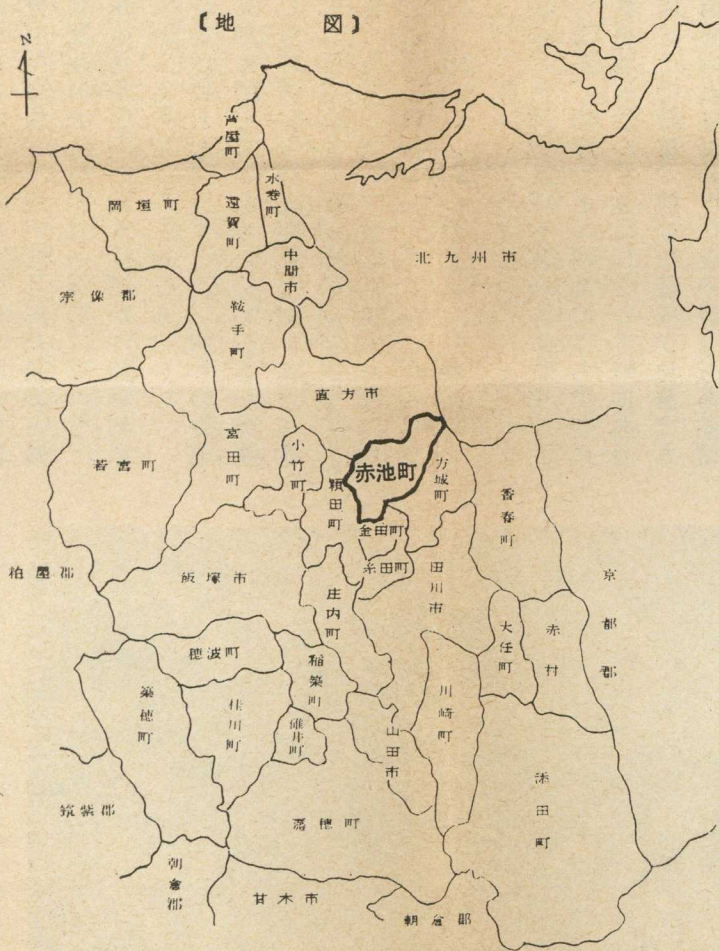
総合計画は

なぜ必要か

(一) 日本経済の変化と「ひずみ」

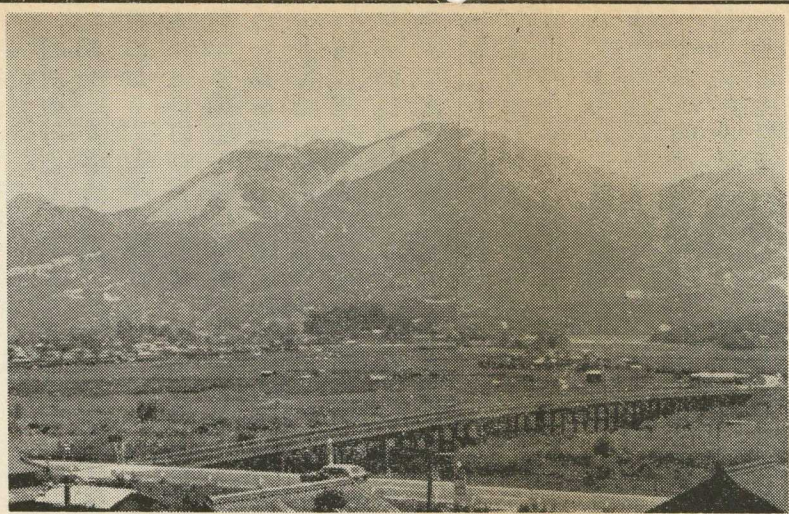
過去十年間に日本経済は飛躍的な発展を遂げた。この高度成長の過程において特に著しい点は、産業や人口が特定の大都市及びその周辺地域に集中する傾向を一層強め、「過密」「過疎」の現象が随所に起り、それに伴って社会的、経済的な弊害も頻発するに至った。大都市問題、地域格差問題などと呼ばれる「ひずみ」がそれである。

すなわち、産業間、地域間の所得格差低生産部門の停滞、土地利用上の障害、工業用水及び生活用水の不足、道路及び



【地図】

集落はその両岸並びに県道田川直方沿線に形づくられ、気候は内陸的であるが四季を通じ緑に恵まれている。特に標高九百一メートルに達する福智連山は昔から筑豊名所の一つであり、高さ三十メートル、巾七メートルに及ぶ白糸の滝、



〔福智連山〕

上野峽を含む山麓一帯、広さ四キロメートルにわたるすすきの原野、天郷高原を含む裾野一帯はさながら天然の公園をなしている。(現在県立公園であるが近く国定公園に指定される予定)

交通網は、県道田川直方線、小竹赤池線、夏吉直方線、八幡赤池線、小竹赤池線バイパス、田川直方線バイパス(建設中)を有し、鉄道は伊田線(直方伊田)が敷設され、国鉄赤池駅がある。特に近時はバス路線が発達し、西鉄バスが遠距離及び町内の主要交通機関の役割を果たしている。

百五十年の昔から遠州七窯の一つと言われる上野焼がある。製造を中止した時期もあったが、そのまま廃絶して上野焼の名声が消滅することを恐れ、窯元は上野焼を復興し先祖三百年の遺業を継承、現在十の窯元があるまでに発展させ、ここにちなかなかの盛況である。

また窯元の多くは県立公園上野峽の景観を前景としており、本町の特色ある産業として各方面から注目されている。

史蹟、文化財についても、この地方一帯の歴史を秘めたものが数多い。足利尊氏の護国寺である天目山興国寺や東光寺等には仏像や古文書が多数保存され、県の文化財に指定されるなど歴史の貴重な資料として重要な意義をもっている。

白糸の滝には、滝見観世音が祀られており、福智修験の往時大師や高僧たちが求道の霊場として参集し、行者のために滝見観世音が安置されたと古記に記されている。時代は中世のものであるが、現在でも観光客や信者が参拝し往時の活況が偲ばれる。

本町の沿革は、明治二十二年の市町村制実施にあたり、赤池、市場、草場、鋤木田、上野を併せて上野村と改称、村政を施した。



〔白糸の滝〕

その後昭和十四年十一月三日町政の施行にあたり、上野村を赤池町と名称を改正し現在に至っているが、その間昭和二十八年には現在の赤池町役場の庁舎が完成し、町行政の中枢部としての役割を果たしている。

特に広域市町村圏における本町の役割は大きく、経済的には直方市、行政的には田川市、田川郡と密接な関係にある。

① 当面する問題点

何よりも「過疎」の問題とその打開策が中心となる。そのためには、この焦点に向って次の諸点が緊急に解決されなければならない。

② 人口流出の防止

本町の人口は唯一の基幹産業であった石炭産業の衰退によって、昭和三十五年国勢調査一万五千五百五十人、昭和四十年国勢調査一万五千九百人、昭和四十五年国勢調査八千七百七十人と急激な減少を続け、ちようど昭和三十五年当時の半数となった。以後若干の減少傾向をたどりながら横ばい状態が続いている。

しかし、これは石炭産業の閉山に伴う家族ぐるみの県外流出や、働くべき適当な職場がないために若年労働者の県外就職等によるものであって、本町の人口流出はほぼ限界にきているものと思われる。

これに対して、本町は有力企業の誘致に努めてきたが、いまだ中小企業の域を出ない数社を誘致したに止まり、人口の流出を抑え、逆に増加の契を挙げるまでには至っていない。

これは失なわれた基幹産業に代るべきものが、みい出せないところにも最も大きな原因がある。また住宅問題としては年次計画によりすすめられてきたが、その需要に應じきれない状態である。

近隣都市のベッドタウンとして抜本的住宅団地造成による施策が大きな課題となっている。

③ 土地利用の適正化

住民の生活を向上し、明るく豊かな健康で住み良い町づくりには、長期的な視野にたつて土地利用の適正化に努めなければならない。

ものであって、土地利用区分の設定と各区分の効果的な利用、区分相互間の有機的な関連開発と町全体の発展に寄与し、住民生活や生産活動が快適かつ能率的に営まれるものでなくてはならない。

企業誘致とも関連するが、個々の企業の立地に際してはあらかじめ公害の発生等、操業後に問題を惹起しないように事前にじゆうぶんな配慮が必要であることは言うまでもない。また、強固な所有権等によって無秩序な土地利用の情性に流される等のことも極力避けなければならない。

現在、市街地地域と言われる住宅、商業、工業、官庁などの用地のうち特に工業用地の殆んど存在しない本町においては、その設定、並びに造成が急務であり均衡のとれた都市建設の鍵でもある。現況よりすれば、耕地面積二十八%、可住地五%(内人口集中地区三%)、山林四十三%、原野十%、雑種地十一%、その他三%となっている。

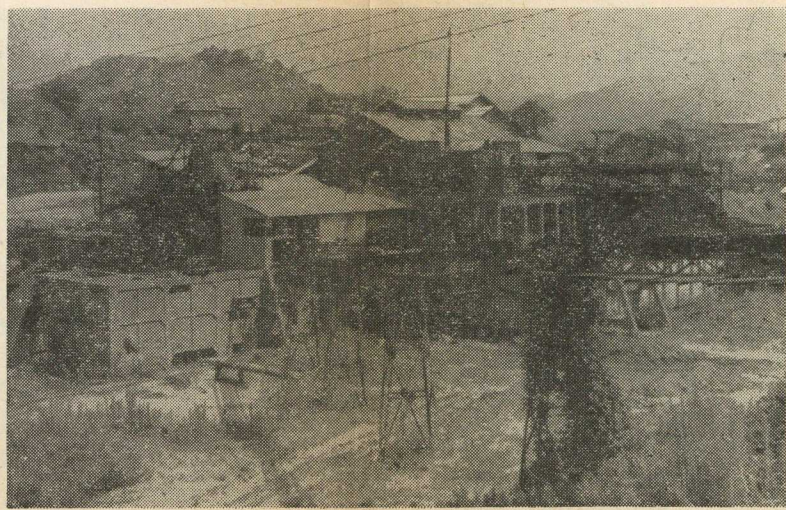
④ 水利用の適正化

本町は極めて多くの溜池や河川をもっているが、住民生活や生産活動を合理的に進めるためには、その用途区分をさらに明確にする必要がある。

(イ) 生活用水

本町の飲料水は地区により可成りの違いがある。赤池、市場地区においては、明鏡赤池の閉山水道による上水道があり鋤木田地区、上野三区にも簡易水道があり、皿山地区へは飲料供給施設が敷設されている。しかし、これは全町の約七十%であり残り三十%地区には水道が敷設されていない。

現在、これらの地区は地下水を利用し給水を行なっているが水量は乏しい。ダム建設による水資源の確保も赤池町の地形からして不可能であり、また彦山川よりの取水もわずかな水量と黒く汚染されているために直接飲料水として利用することは出来ない。



〔過去の明鏡〕

道を敷設することは急務であり、上野全地区を一本化した簡易水道を計画し、しかる後に赤池町全体の水道を一本化するような総合計画を樹てることが今後に残された問題である。また、福智川から彦山川に放流する水量の有効利用も検討する必要がある。

住民の増加に対処出来るよう、地下水資源の基盤調査等によるじゆうぶんな水量を確保しなければならぬ。

(ロ) 工業用水

現在、工業地域工場団地と言うべき所が存在しないために問題が後廻しにされてきたが、今後本町が企業誘致を積極的に進めるべく以上、最も重要な問題である。

特に、工場団地の造成を進めるべく予定されている地域には河川よりの取水である。上水道による給水等は極めて困難であり、殆んど地下水によってまかなわなければならない。しかし、明鏡赤池の旧坑道もあり安定鉱害との難かしい問題を控えているだけに、長期計画による工業用水資源の確保が必要である。

水の需要は、工場の進出に伴って急速に増加することを忘れてはならない。

(イ) 農業用水

本町の農業用水は、その多くが水田に對するものであるが、農業構造の変化によって花卉栽培、果樹育成等が増え、年間を通じて平均した水量を必要とする方向に向っている。

水源として大小の溜池七十三ヶ所、福智川を利用する河川、井堰、灌漑揚水用ポンプ施設四ヶ所等があり、河川、溜池よりの取水以外に地下水も利用されている。しかし、石炭採掘による鉱害で水路、排水路、溜池等の改良復旧並びに整備が望まれる。

さらに、鉱害復旧と地域開発の総合計画の中で、用水及び排水の水利用途による整理統合も大きな今後の課題である。

特に水利用、水源確保の広域的な性格から隣接市町村とも協調互恵の線で接することが大切であり、水利用権にからむ争いなどは甚だしく、水利用の適正化を妨げるものである。

(ロ) 交通体系の整備

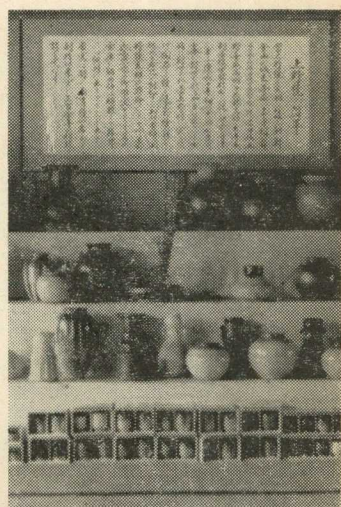
言うまでもなく発展する都市はほとんど交通の要衝である。産業人口と共に交通の便利なところに集まることを忘れることは出来ない。

(イ) 道 路

隣接都市並びに中央と結ぶ広域的な基幹道路と町民の日常生活、生産活動を基盤にした町道と里道とがある。

本町において、社会経済の動脈となる主要道路は、①田川直方線、②夏吉直方線、③小竹赤池線、④赤池八幡線の四県道である。しかし、北九州工業地帯と結ぶべき要素を持った赤池八幡線が建設途中で中止されていることは全く残念である。すでに、上野峽より鷹取山の中腹まで出来あがっているこの県営事業を短時間で完成させるよう努力しなければならぬ。

また、北九州を結びさらに中央と結ぶためには、福智山を貫通する道路等の建設が必要である。



〔上野焼〕

設が必要である。

つぎに本町の中央を流れる彦山川によって町が東西に二分されており、赤池町の経済的發展を大きく阻害する結果となっている。

幸い上野地区には、田川直方線バイパスが建設中であり、これとT字形に結ぶ橋梁の架設を行ない、道路を小竹赤池線バイパスの延長上に建設することが必要である。予測される交通量の増加等から考慮して赤池地区、市場地区を通じて額田町方面へ通ずる赤池循環道路の建設もまた必要であろう。

これは、将来九州地区の中心、福岡地帯へ通ずる基幹的な性格を持つものになると思われる。なお瀬ヶ谷、吉ヶ浦地区に工業地域が造成されることになれば、直方中泉団地を結ぶことも必要となるであろう。

町道の総数百三路線も毎年失対、開就等の一般事業により舗装改良を行なっているが、道路の新設及び改良には多額の経費を必要としている。また、里道の町道認定も広域的見地からすれば積極的に格上げの検討も必要である。

地価の高騰、工事費の値上り等、やむを得ぬ点はあるが、財源を確保する上から町民に対する理解と協力をもとめる努力も大きな課題である。

(ロ) 交通機関

主要交通機関は、国鉄伊田線、西鉄バス、国鉄バスの三つである。国鉄伊田線は本町の西部を縦断している。国鉄赤池

駅は、かつて石炭搬出駅として活況を呈したが昔日の面影はない。

赤字路線の本数削減という基本方針のもとに、列車本数を減らされる運命にあり、朝夕の通勤客を運ぶにすぎない。道路が整備されるにつれてバスの運行が増え、西鉄の田川直方、飯塚方城路線が主要機関となった。また、上野地区には国鉄バスが運行されているが乗客が少ないことから伊田線と同じ運命にあり廃止の声も出ている。しかし、前述の直方田川線バイパスの完成、これを結ぶ小竹赤池線バイパスの延長に赤池上野を結ぶ橋の架設が必要であろう。

それによつて、ますますバスによる町民の足を確保することが必要となる。定期バスの運行、増便の問題は、町の發展と相関関係にあるだけに極めて大きな課題と考えられる。また、国鉄についても産炭地域振興の国の方針からダイヤ削減については再考してもらわなければならない。

(イ) 農業の振興

本町の農業は、米作、果樹、花卉が中心である。田二百八十九ヘクタール、畑



〔興國寺と仏像〕

三十七ヘクタール、果樹園三十一ヘクタール、専業農家五十二戸、兼業農家四百九十八戸、この数字が示すようにその九十%が兼業農家であつて、日常の農業労働は、老人、婦人の手へ移行しており、農業の荒廃現象さえも露呈している。基幹労働力は、農業外所得をもとめて転出している。

土地利用の点から見ても平坦な米麦地

帯は冬季裏作も行なわれず、休耕田が多く、農地としての利用度が低下していることは明らかである。花卉、園芸、果樹等の盛んな丘陵地帯の中間台地が僅かに活気をおびている現状である。また、農地も鉱害復旧事業によつて復旧工事が遂次行なわれている実状もあつて農業の零細化、農民の意欲低下は蔽うべくもない。しかし、こうした農業の現況を脱皮するため、農民自から農業改善について積極的に究明すると共に、更に、国家的見地からも抜本的な農業政策、農業構造の改善が必要である。

(ロ) 商業の振興

本町の商業地域は、商店と一般住宅の混在する準商業地域である。購買人口の減少、日用品雑貨を除けば商品の品不足品質種類の変化に乏しい等の理由から顧客の大半を直方市、飯塚市に取られている状態である。そのため、商業もまた兼業化の方向をたどり、本来の姿を失いつつある。

商工会の組織強化、商店街の共同化、協業化等によつて商業規模の拡大と近代化を推進することが目下の急務と思われる。しかし、根本的には購買力の増大を図らなければならない。このことは企業誘致等による購買人口を増やすことによつて可能となる。この点において、有力企業の誘致が望まれるわけである。また、郷土産業としての上野焼等を積極的に拡販して行くことも産業の振興とあわせて考慮しなければならない。

(イ) 住 宅

低所得者層が非常に多いために、公営住宅に對する入居希望者は極めて多い。最近の応募者の倍率からみても、その需要は旺盛で、町の年次計画に基づく建設では応じ切れない有様である。

また、炭鉱閉山に伴つて老朽化した炭住を民間へ払い下げしているが老朽が目だつ不良住宅も数多く、改良の必要に迫られている。特に、暗い炭鉱のイメージを取り去る意味からも必要なことで、



〔滝見観世音〕

新しい生活環境を生み出す意味で真剣に検討されるべき問題であると考えられる。

また、住民の生活水準の向上とあわせゆとりある住宅設計が必要となるであろう。

(ロ) 観 光

観光資源として福智連峰上野峽、天郷高原などは恵まれた自然の景観をもっている。すでに県立公園に指定され、近く国定公園となる予定の福智山系上野峽はほとんど未開発の状態にある。

自然を保護しつつ、観光地としての開発をめざすならば、将来有望と思われるが、たくさんのお客を一度に引き入れるには若干狭いである点に今後の問題が残されるであろう。

あわせて、レジャー産業の導入(例えばボーリング場、スキー場等)のレクリエーションセンターとしての活用もじゅうぶんに考えられるところである。

(イ) 所 得

住民の所得を大別すると、給与所得、農業所得、商業所得に分れ、給与所得八十%、農業所得七%、商業所得六%、その他七%という比率である。

所得の格差は他の市町村にくらべ年々ひろがりつつあるが、特に、無所得者の数が増え生活保護世帯が増加する傾向にあり、現在全世帯数の約二十五%に及んでいることは遺憾なことである。特に、これらの住民に對しては適切な保護指導と自立更生のための積極的な施